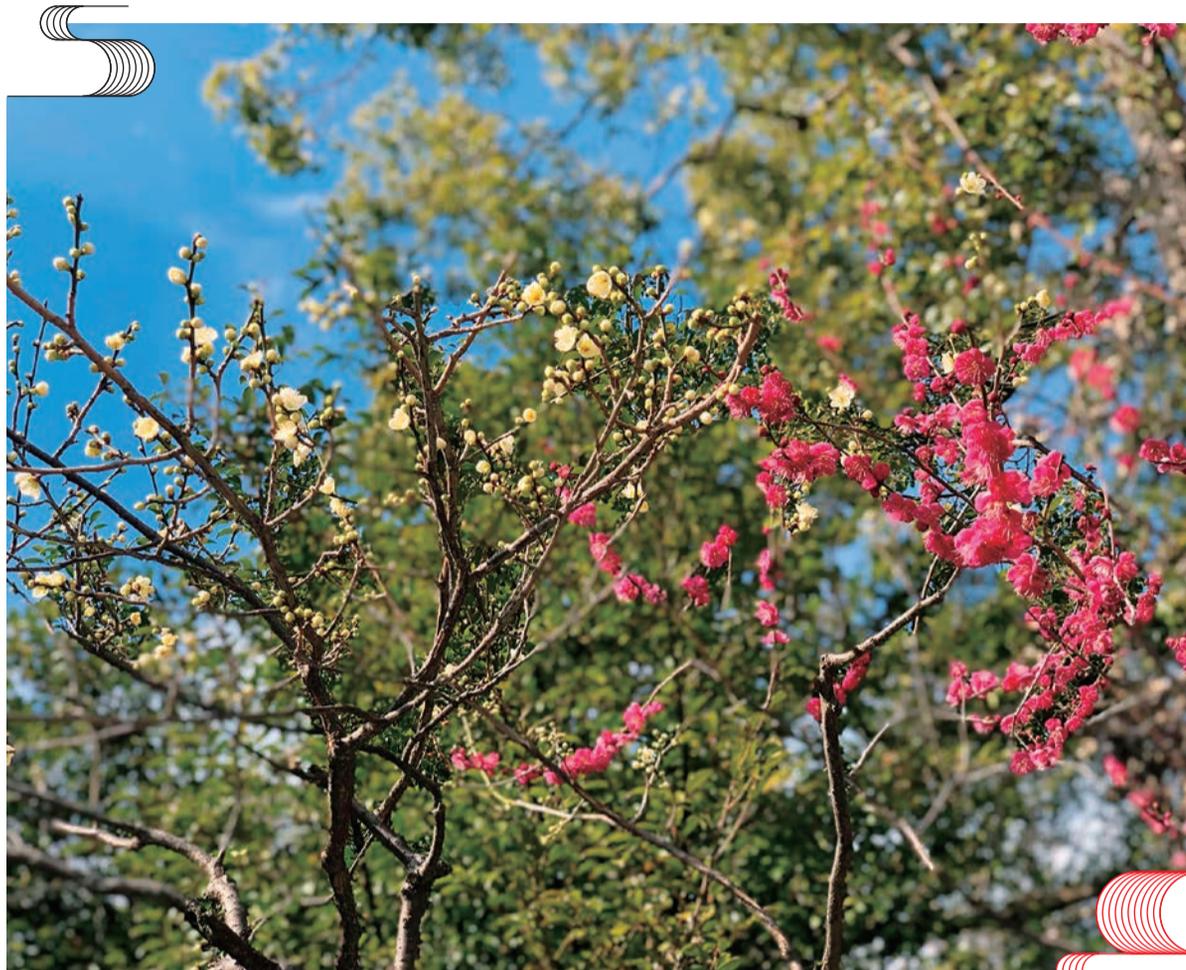


あかいしんぶん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

企画・制作：株式会社 新聞ビル



よんひゃくじのきよつがたり

四百字の京がたり

ひいさま 藤間勘萃

NO.010

東風吹かば匂い起こせよ梅の花
主人なしとて春な忘れそ

北野天満宮は言わずと知れた梅の名所。二万坪の境内に、菅原道真公ゆかりの梅の木が立ち並ぶ。その数、ゆうに千五百本。道真公の月命日(二月二十五日)に行われる「梅花祭り」では、上七軒の芸舞妓による野点を楽しみ、梅苑をそぞろ歩いて、五十種類をこえる甘美な梅の香りを堪能できる。

本殿前に咲き誇る、ひときわ美しい枝ぶりの「紅和魂梅(べにわこんばい)」。この御神木には、道真公の飛梅伝説が。

時の左大臣の計略で、大宰府へと追われた道真公。京都を離れる時、邸内の梅の花に歌を詠んだ。

春の東風が吹いたら、また美しい花を咲かせておくれ。主がいなくても、春に花咲くの忘れてくれるなよ。

これに感じ入った梅の花が、京の都から太宰府へと、一夜のうちに飛んでいったという伝説である。

遠くに去った主を慕い、矢も楯もたまらず主のもとへ飛んで行ったのが白梅。

遠くに去った主の言いつけを守り、主なき庭で毎年花を咲かせたのが紅梅。

愛しい人が遠くへ行ってしまう時、白梅か紅梅か、果たしてどちらに倣うのがいいものか。

ひいさま (松根裕美)

京都生まれ、京都育ち。学生時代は日英を問わず朗読や作文に多く携わる。高校時代、裏千家主催学校茶道体験論文コンテストにて優秀賞受賞、第18回裏千家ハイセミナーに招待。京都私学ESS連盟主催英語暗唱大会優勝、英語弁論大会優勝。大学時代、世界遺産「下鴨神社」で十二単王朝舞を学び、名月管絃祭で舞を奉納。現在は京がたりの舞台活動に加え、一般社団法人きものカラーコーディネーター協会認定講師として、きもの・色・ことばに関わる各種レッスンやコンサルティングを、名古屋を中心に各地で展開。きものカラーワークやセルフ和髪レッスンなど、地方や海外からも生徒が訪れる人気講座を運営。
Instagram → @hiromimatsune



ひいさま 藤間勘萃 幻燈館

『梅花祭り』動画をYouTubeでご覧いただけます。
QRコードを読み取っていただくか、「藤間梅花」で検索して下さい。

藤間勘萃

1958年に名古屋で生まれ、1977年にデビュー。日本舞踊家(宗家 藤間流 名執)/楽師としてNHK「日曜美術館」や「花の舞・花の宴」、養老孟司(東京大学名誉教授)との「以心伝心・以身伝心」、久田舜一郎(小鼓方 大倉流15代宗家)との「秋天の興」など放送や舞台上に数多く携わる。作/編曲家として「世界デザイン博覧会」テーマ館音楽、名古屋芸術祭主催公演テーマ曲、関西二期会オペラ、合唱曲「弥陀観音大勢至」(深井丸 興西寺所蔵)、「おとほぎ」(あいちオカリナ フェスタ テーマ曲)、音楽版「浄土真宗 正信偈草四句目下」(光壽山 阿彌陀寺所蔵)などを手掛ける。名古屋音楽大学音楽学部 作曲学科卒業。日本福祉大学 社会福祉学部を経て、現在、東海学園大学 教育学部にて講師。



ひいさま 藤間勘萃の
ホームページはこちら



日々是好日

「主人の母の話」

日々は、とにかく働いて多分、学校は山の上。子どもたち

に背中を押してもらい、坂道を

通った。日々は愉快そうに顔

して話してくれました。

授業といえは、今で言う国語

の時間はまさしく真剣に指導

されたようです。作文に力を入

れていて、よく書かされたの

事。日々の実家は農作業のため

に牛を1頭飼っていて、その牛

の世話をして、日々の自分の気

持ちを地元の言葉で書いたこ

とを「それは、どういう事だね」

と詳しく知らがり、その表現

をとても気に入ってもらい、た

びたび放課後に残され、作文を

自分だけ書かされたとも話し

てました。

夏休みには、同僚の女先生と

のデートにカモフラージュで連

れて行かれ、名鉄電車と一緒に

乗り、住吉神社まで行って、帰

り、住吉神社まで来て、1冊

買ってもらい、「気を付けて帰

なさいね」と、住吉の駅まで2人

に見送られ、独りぼっちで河和

駅まで帰ってきたそうです。



美の回廊 Vol.72

水野 伊津子 「不思議の国 ネパールスケッチ旅行②」

私たちが訪れた11月はネパールのベストシーズンと言われています。6月か



写真①

ダンブス村は、ボカラのレイクサイドから15kmほど北西にある標高1800mの小さな



写真②

今回のツアーは参加者18名に日本からの添乗員と現地ガイドの20名。平均年齢は



写真③

添乗員の落合さんが「桜が咲いてます」というので、いつものジョークだと思ってい



写真④

村人は二毛作、暖かいので米と麦を作っています。途中の道で大きなかごを背



写真⑤

ここで絵を描く団体は珍しいのか、子供たちが頻りに寄ってきます。11/15は第3



写真⑥

宿の若いスタッフの女の子が、頭にターバンを巻いて青のパンジャビドレスを着て



写真⑦

ネパール人の顔・チベットから入ってきた民族が多いのか背は低く、丸顔で鼻も低く

応募
日々の生活の中でチョットしたこんな事・あんな事・心とむ事、面白いエピソード等

「僕も会ったことあるよ」
僕のお正月はお年玉をみながら、お正月のご挨拶がマラウイに行くことを楽しみにしているよ。

若竹俳壇
虎落笛聞けば細胞緊張す
炬燵から出られぬ体感0度C
初鏡のぞけば二人だけの家

谷川と志江
塚本 千鶴
古川 義高
関 義美
細井 京子

